



鹿児島県立 大口高等学校

地域の進学校として生き残る

「地域の願いに応える「全方位の進路指導」」

今回の訪問校は、鹿児島県立大口高等学校である。大口高校は、2014（平成26）年度に同校が所在する伊佐市の「大学進学奨励交付金事業」がメディアに取り上げられ、全国的に注目を集めた高校である。同事業は、東京大学をはじめとした難関国公立に合格した生徒に奨励金として100万円を支給するというものである。教育評論家の尾木直樹さんからは、「なりふり構わず難関大への合格実績を上げて高校のランクを上げようと必死？」しかし、その方法はなんという「教育犯罪」などと厳しい言葉で批判を受けもした。

しかしのちに述べるように、こうした

学する生徒も増えていったという。学力的にも進路志望的にも多様な広がりを見せるようになった大口高校は、習熟度別授業を行うなど対応していたが、入学者減が続いていた。

そして、2014（平成26）年の7月、中学3年生の進路希望調査において大口高校希望者が、定員120人に対し56人となった。定員割れが続く、前年度も3クラス分の募集にもかかわらず自然減の2クラス編成であったこともあり、県教委から募集定員を80名、つまり1学年2クラスに減らすと打診されることとなった。

1学年2クラスになると教員数が減り、大学入試に対応した教科目の教員を確保することが困難になる。大学進学を希望する中学生は、ますます大口高校を敬遠するようになり、統廃合の危機も見え隠れするようになってしまった。

市は1学年3クラスを維持することをめざし、5年間5000万円の「大口高

校活性化基金」を創設したのである。

伊佐市の緊急支援策

2014（平成26）年11月に市議会で認められた伊佐市の「大口高校緊急支援策」には二つの柱がある。一つ目が、「大学進学奨励金交付事業」である。東京大学をはじめ、旧帝大クラスの難関国公立大学や早稲田・慶応といった難関私立大学に合格した生徒に100万円の奨励金を出すというものである。また、前記以外の国公立大学やそれと同程度の私立大学に合格した生徒にも30万円の奨励金を出すこととした。

もう一つが「進学指導連携事業」である。北九州予備校と提携して、月1回程度、土日を利用して予備校講師による数学・英語等の特別講義を開講するものである。90分×2コマの授業を5月から12月は2、3年生、1月～2月は1、2年生の希望者が受講している。

そのほかにも、「魅力ある高校づくり補助金」として受け取った100万円を進学指導（グレイドアップゼミ参加のバスター等）、中高連携・交流活動、広報活動（学校案内等の各種印刷代）などに活用している。

さらには、通学バス代半額補助、伊佐市奨学金、講演会開催など教育活動を活性化したり、生徒の就学を支援する施策がとられている。なお、大口高校だけでなく、伊佐市内にある県立伊佐農林高校、私立大口明光学園にも同様の支援策がとられている。

「大学進学奨励金交付事業」は、マスクミに注目されて大きな反響を呼び、少なからぬ批判も受けた。しかし、地元や大口高生からは好意的に受け止められていたという。この年度、100万円を受け取る生徒はいなかったが、鹿児島大学をはじめ国公立大学への合格者が19人となった。前年度が4人であったことを考えると大きな飛躍である。この結果は、「奨励

金」の結果というよりは、それまで大口高校が積み上げてきた学習指導・進路指導の結果であることは言うまでもないが、周囲に与えるインパクトとしては大きなものとなったと思われる。

2015（平成27）年4月に入学した生徒は66人で、前年7月に56人だった入学希望者から10人増となったものの、2年連続の「自然減」での2クラス編成となった。

2015（平成27）年7月の大口高校希望者は78名、最終的には81名が2016（平成28）年度入学生として大口高校の門をくぐった。81名は、3クラス編成を展開できる最低ラインをクリアしたということを意味する。

2015年度の卒業生からは、九州大学に1名合格者を輩出し、1000万円支給第1号となった。九州大学への合格者は実に20年ぶりであったそうである。他にも国公立大学合格者が8名と着実に進学希望者への進路保障を確立しつつあ

る。また就職決定率も100%と、大口高校が掲げる「全方位の進路指導」方針が成果を上げている（表参照）。

表 近年の合格実績(人)

	2014年度	2015年度
国公立大学	19	9
私立大学	37	19
短期大学	17	11
専門学校	35	34
就職	13	11
卒業生数	106	84



生徒募集に向けた取り組み

もちろん、市の施策だけでなく、大口高校自身も教職員挙げて入学者増に向けて積極的な取り組みを行ってきた。以前から、各中学校での学校説明会、保護者説明会、中学生1日体験入学などを行ってきたが、それをより充実させるとともに、大口高生も大口高校の魅力を伝える主体となって活動するようになった。

資料 平成26年度からの主な広報活動

- ・里帰り報告会
- ・大口中央中学校一日体験入学
- ・中学校での出前授業
- ・中高部活動交流
- ・新規パンフレット作成
- ・「学校案内」を管内全中学生に配布
- ・学校だよりを近隣中学3年生に配布
- ・文化祭・体育祭案内を伊佐市全戸配布
- ・大口高校旗争奪サッカー大会の開催

「里帰り報告会」は、大口高生が母校の中学校で高校生活の様子や大口高校の魅力を話す取り組みである。進路決定前の10月末に中学3年生に、3月には中学2年生を対象に報告会を行っている。大口高生は、自分たちでパワーポイントの資

るを聞きにくるなど個別指導を受ける生徒もたくさんいるという。他にも、希望制であった朝課外や土曜課外を全員受講にしたり、校時を見直すことで放課後プラス15分確保し、部活動や個別指導の時間に充てるなどきめ細かな指導が図られている。

・地域貢献活動

地域の清掃などのボランティア活動や、地域の課題を考える「地方創生ワークショップ」などの地域貢献活動にも積極的に取り組んでいる。「もみじ祭り」という地域イベントを観光協会と連携して、大口高校生がプロデュースした。また、伊佐市教育委員会が主催する「冬休み算数・数学&英語パワーアップ自習室」では、大口高生が「先生」として地域の小学生の勉強を見ている。学力向上に直接に結び付くものではないかもしれないが、この取り組みを通じて、生徒たちは自己有用感を高め、地域への愛着を深め、地域の一員としての自覚を高めて

いった。結果として学習意欲が高まったり、進路意識が高まった生徒も少なくないそうである。

✓ 地元の進学校として

大口高校は、伊佐市の緊急支援策からわかるとおり、地元になくはならない存在である。同じように統廃合の危機にある高校は全国に多くある。部活動を軸に入学者を増やそうとしたり、職業体験学習を売りにしたりして生き残りをかける高校もある。大口高校のスタンスは明確で、地元の「進学校」として生き残るというものである。

実は大口高校は部活動もたいへん盛んで、9割近い生徒が部活動に熱心に取り組む、好成績を上げている。なかでもラグビー部は、ぎりぎりの部員数で全国大会を争う力を持っている。大口高校が向かう道は、伊佐市外からの生徒増を図るとともに、地元の子どもたちに多様な進

路を保障する高校であることである。とりわけ進学校として基礎学力を高めることが目標となっている。

伊佐市が、進学奨励金を用意したのも1学年3クラスを維持する進学校として生き残るためのギリギリの戦いだっただけである。決して「高校ランクを上げる」ためなどではない。地元の子どもたちが、時間とお金をかけなければ高校に行けなくなる。そうした地域の願いにこたえるべく地元の進学校として「全方位の進路指導」を高めていこうとしているのが大口高校である。大口高校の取り組みは、同じ状況に置かれた全国の高校が参照することのできるものであるし、勇気づけるものでもあるだろう。また、後期中等教育の地域間格差問題の重要性を改めて考えさせられる訪問にもなった。

「学校所在地」

〒895-2511 鹿児島県伊佐市大口里2670
TEL 0995-22-1441
FAX 0995-22-9227